

令和7年度 比治山大学
現代文化学部・健康栄養学部・短期大学部
一般選抜 前期C日程 問題

国 語

受験番号	
氏 名	

解答上の注意

1. この問題冊子は、表紙を含み1ページから11ページまであります。
また、解答用紙は1枚です。試験開始後、すぐに中を確認、印刷
や枚数などに不備と思われる点があれば、手を挙げて監督者に知ら
せなさい。
2. 解答は、すべて、解答用紙の所定の欄に記入しなさい。
3. この問題冊子と解答用紙を持ち出してはいけません。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む）

論理的なシユビ①一貫性が成り立つのは、誰しもが認めるところの、あるいは誰しもが認めざるを得ないところのある基準や原点を前提としている。その基準や原点を守る限りは、それから外れたものに対して不寛容になるのは当然であろう。基準や原点はより広く言えば、規範（きまり）ということになるが、そのような精神からは、ともに暮らす地域社会においてもまた曖昧性が認められない。鯖田豊之はそれを、とても「他人のことが気になる」人々が暮らす社会だと言っている。つまりヨーロッパ人は強烈な社会意識を持つ人々であり、「一口にいえば、他人が自分と同じでないことに我慢できない、一種の」 「精神である。自己や自己の家族以外のものに関心がありすぎる」人々だという。彼らは政治の世界でもいまだに中東やアジアの情勢を黙って見てはいられないようだが、鯖田豊之はその精神構造を農耕文化との関連から見事に説明している。すなわちヨーロッパ人の規範意識の強烈さは三圃制農業に由来するという説である。

ヨーロッパの麦作では、日本の米作とちがって、もともと耕地の安定性がとぼしかった。ある年には麦畑であったところも、つぎの年には休耕地になって家畜がうろつく。……三圃制の要求する複雑な土地利用は、個々の農家がバラバラにやったのでは、あまり効果がない。家畜の放牧にはかなりまとまった面積を必要とするので、各農家がお互いに協定して、ある一定区画内の畑には同じ作物を栽培し、休耕期にはいっせいに家畜を共同放牧するほうが能率的である。（鯖田豊之『肉食の思想』）

A
ヨーロッパの農業と比べると日本の農業は、水田であっても焼畑であっても狭い土地に労力を集約して播種や収穫を行ない、それが毎年同じ時期に集中するため、労働の貸し借りによるイッセイ作業を必要とした。そのため農作業では周りを見ながらみんなに合わせて働く必要がある。ヨーロッパの農業では三圃制の規則にみんなが合わせる必要が要請されるが、日本の農業ではみんなの作業に合わせる必要が要請される。社会意識が強烈に働くヨーロッパの社会では、それと別に許されるべき個人の領域が明確に意識されるが、みんなに合わせる必要はない社会では、個人意識よりも仲間意識のほうが強くなる。日本の農業では繁忙期に労働力の貸し借りをするを「結い」といった。借りた家ではいづれ返さなければならぬ。また、貸した家ではいづれ必ず返つてくると考えていた。このような意識は「情けは人のためならず」（他人にかけた親切はいつか自分の身の上にも返ってくる）ということわざにも見られるように、

農作業を越えた人間関係においても現れている。世の中は貸し借りによってほど良く成り立っているというのが日本の農耕民の考えであった。

^B「社会」と「個人」という対になった領域が「日本人」の意識になかったわけではない。しかし、英語 society の翻訳語に「世の中」でも「世間」でもない「社会」という新造語を、あえて当てざるをえなかったように、かつて日本には「社会」と呼べるようなものはなかったのである。当然それと密接な関係にある「個人」もなかった。部落差別に苦しむ青年を描いた島崎藤村の小説『破戒』（明治三九）では「社会」という漢字に「よのなか」のルビをふっている。まさに『破戒』の中に描かれた社会は、過去の因習をそのまま引きずって人々がお互いに監視し合うような「世の中」であり「世間」であった。個人意識もまた総じて薄く、子ども時代には誰かの子であり、孫であり、大人になってからは、誰かの夫であり、妻であり、誰かの父であり、母でありと、そのような、関係性の中の存在として個人がとらえられている。このことは「私」「あなた」といった人称代名詞の使用についても言えることで、「日本人はむしろできるだけこれらを使わず、何か別のことばで会話を進めていこうとする傾向が明瞭である。自分を示すときも相手をさすときも、いわゆる代名詞より、親族関係、地位関係、場所関係を示すことばが多用される。職業名もしばしば相手または第三者を指すために用いられる」（鈴木孝夫『ことばと文化』）。

日本では、個人を取り巻いているのが、社会ではなく世間だったのである。その世間とは、たとえば近松門左衛門の浄瑠璃『心中天網島』に、夫に対する妻の言葉として「内裸でも外錦」とか「男は世間が大事」とあるように、内（家庭）に対する外の領域である。家庭ではソマツな身なりをしていてもかまわないが、世間では立派な服装をしなければならない。とくに男は世間で恥をかかないようにしなければならない、というのである。「日本人」の個人的領域は家庭の中に埋没してあった。その周りにこれを監視するような世間がある。

土居健郎は「日本人にとって内と外の生活空間は、厳密に言えば三つの同心円から」と指摘する。また、柳文章著『翻訳語の論理』でも「日本人」の精神的世界には三つの領域があるようだといひ、大きくは〈内〉と〈外〉とに分類されているけれども、じつは世間にもまた〈内〉の性格があつて、〈外〉はさらにその外側にある〈旅〉の世界だといひ。〈世間〉を取り囲む〈外〉の領域は、^D「旅の恥はかき捨て」ということわざもあるように、完全なよその世界と考えられた。とりわけ日本の村落ではよそから来た人を「旅の者」といい、またよそへ出かけることを旅へ行くといひ。旅は必ずし

も今日の旅行の意味ではない。旅に対して世間は、みんなに合わせる必要のある領域であり、その内側にある個人的領域に干渉してくる領域である。世間は、恥をかかないように、できるだけみんなと同じように行動しなければならない領域であった。「日本人」の罪悪感、善悪の基準による悪の意識から生まれるのではなく、自分の属する集団を裏切ることによって生まれるといわれるのも、右のようなことからきている。今日、主体的に生きようとする現代人でもそこからなかなか抜けがたいのは日本文化に染みついた因習にはかならないからであろう。

(板垣俊一『日本文化入門』による。)

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 二重傍線部①・②の文章中での意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 因習

ア 物事の原因となってきた習慣

イ 古くから続く弊害のある風習

ウ 馬鹿げていて古臭い差別意識

エ 忌まわしく恐ろしい言い伝え

② 埋没

ア かくれて見えなくなること

イ 大切なものとして保管する

ウ いつのまにか忘れてしまう

エ 危険から遠ざけて育てる

問三 空欄

にあってはまる語として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア おせっかい

イ 思いやり

ウ 他人任せ

エ 反骨

問四

波線部 A 「ヨーロッパの農業と比べると日本の農業は」とあるが、「ヨーロッパの農業」と「日本の農業」の違いから生まれる意識の差について筆者はどのように述べているか。次の文章の空欄を補って説明を完成させなさい。

1

2

それぞれ十字以上十五字以内で文章中の語句を用いて記しなさい。

ヨーロッパの農業では、それぞれの作業者は

1

ことが求められるため、社会意識が強くなり、日本

の農業では、それぞれの作業者は

2

ことが求められるため、仲間意識が強くなる。

問五 波線部 B 「『社会』と『個人』という対になった領域が『日本人』の意識になかったわけではない」とあるが、日本とヨーロッパにおける「社会」や「個人」、「世間」のとらえ方の違いの説明として最も適当なものを、次の A～E の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 日本における「世間」は過去の因習を引きずった概念だが、ヨーロッパにおける「社会」は自由や平等を掲げた新しい概念である。

I 日本では「個人」を「個人」自体としてとらえないが、ヨーロッパでは「社会」に対する概念として「個人」の領域が明確に意識されている。

ウ 日本における「世間」は〈内〉に対する〈外〉の領域だが、ヨーロッパにおける「社会」はその中に〈内〉を内包した広い領域である。

エ 日本の「個人」は人々が監視し合うような密接なつながりをもつが、ヨーロッパでは「個人」同士の関係が冷淡で、弱いつながりしかない。

問六 波線部 C 「社会ではなく世間だった」とあるが、「〈旅〉の世界」と比べた場合、「世間」という領域はどのようなものであると筆者は述べているか。文章中の語句を用いて三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問七 波線部 D 「『旅の恥はかき捨て』ということわざ」とあるが、なぜ筆者はこの「ことわざ」を挙げたのか。その説明として最も適当なものを、次の A～E の中から一つ選び、記号で答えなさい。

A 〈旅〉が恥をかくことを無視できる領域であることを示し、それと対比的に個人の行動を規定する〈世間〉の性質を強調しようとしたから。

I ことわざから読み取れる、〈内〉という個人的領域以外では恥を恥と思わず平気であるような日本人の態度を問題視しようとしたから。

ウ 日本人の罪悪感が悪の意識からは生まれず、属する集団を裏切ることでも生まれてくるという特殊なものであることを明確にしようとしたから。

エ 日本人がことわざに表現されているような意識から抜けがたいのは、それが日本文化に染みついた因習だからだと主張しようとしたから。

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ヨーロッパ人は、誰でも認める基準や原点を前提とすることによって論理的な一貫性を成り立たせているため、その基準や原点から外れたものがいれば不寛容になり、争いを挑もうとしてしまう。

イ ヨーロッパ人は、たとえ地理上は遠く離れた中東やアジアの情勢のようなものでも、他人の動向は自己や自己の家族にとって無関係なものではないと考えて、同じ文化を広めて共有しようとする。

ウ 労働の貸し借りによる作業が必要なことによって生じた、世の中は貸し借りによってうまく成り立っているという意識は、農耕民に限らず、日本人全般の人間関係における考え方に表れている。

エ 個人意識が薄い日本人は、「私」「あなた」といった個人を明確にする人称代名詞の使用を嫌い、職業名や地位を示す語などを用いて自分や相手を指し示す、他にはない特殊な敬語体系を生んでいる。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む)

自然をめぐる社会のしくみを考えていると、いつも「所有」にぶちあたる。

そもそも、「所有」とはいったい何だろうか？

A
ビンセント・ヴァン・ゴッホの作品に「医師ガシエの肖像」^①という絵がある。一八九〇年、ゴッホが死の二ヶ月あまり前に書いた作品だ(ゴッホは三七歳だった)。医師ガシエは、ゴッホをミ^②ていた精神科医。この絵は生前、ゴッホの手によって売られることはなかったが、死後親族によって売られ、その後転々とする。この絵が改めてキヤッコウを浴びたのは、一九九〇年五月、ニューヨークでおこなわれた競売だった。この競売で、大昭和製紙(現日本製紙)の名誉会長(当時)、齊藤了英氏が八二五〇万ドル(約一二五億円)という高額で落札し、世界を驚かせた。

しかし、世界がもつと驚いたのは購入後、齊藤氏が「おれが死んだら、棺桶にいっしょに入れて焼いてやってくれ」と発言したことだった。当然世界中から非難の声が上がる。フランス美術館連盟のジャック・サロワ会長(当時)は「古代エジプトのファラオ(王)たちでさえ、副葬美術品の保存には細心の注意を払っていた」^④。「中略」文化遺産の保護という人類の権利をシ^⑤ンガイするものであり、憤激に値する」と批判した。

B
このエピソードは面白い。世界の人びとはなぜ非難の声を上げたのか。絵を買ったのは齊藤氏だから、煮ようが焼こうが法律的には何の問題もない。ゴッホの絵がこの世からなくなることとは、少なくとも人々の生き死には関係ない。
(a)、私たちはゴッホの絵を焼くなど言語道断だ、という気持ちをもっている。この発言を非難することを要らぬ干渉とは考えない。

つまり私たちはゴッホの絵を「所有」を超えたものと見ているのである。誰が所有していようが、それは人類の財産である。と。所有していなくても、それについて発言したり、あるいは権利を行使したり、利用したりすることがある。少し考えただけでも、「所有」とは何かという問題は実におもしろい。

(b)、ある町の景観問題の例を考えてみよう。その住民たちは自分たちの町の町並みを気に入っていて、町並みは自分たちの生活の大事な側面だと考えていた。そこにある鉄塔が建つことになった。住民たちからすれば、明らかにそれは「自分たちの景観」を壊すものだった。単に「好きな景観が壊れる」ということを越えて、自分たちの体の一

部が壊されるような感覚すらもった。住民たちは反対運動に立ち上がる。もちろん景観を「所有」することはできない。しかし、ここには確実に「私たちの景観」という意識が働いている。

こうした例は無数に考えることができる。たとえば、たまたま拾った小石は自分のものか、家の玄関先に咲く花はその家の人のものか、カフェで先に座った席は自分のものか、子どもは親のものか、自分の体は自分のものか、などなど、「誰々のもの」の問題、「所有」の問題はどこまでも広がりそうだ。

考えてみると、他人が存在しなければ「所有」も存在しない。この世に自分しかないなければ、「所有」を主張する必要もない。つまり「所有」は、あくまで である。

広義の「所有」、ということを考えてみると、それは、「人がモノ・コトに及ぼす関係について社会的に承認された状態」だと言うことができる。しかし、人がモノ・コトに及ぼす関係も多様だし、それが社会的に承認されるさまも多様だ。法律的な所有、つまり「自由にその所有物の使用、収益及び処分をする権利」（民法第二〇六条）は、実はそうした多様な「所有」のごく一部にすぎない、と見ることができる。

^C 山や川や植物、海洋資源といった自然については、なおさら、その「所有」の幅は大きくなる。「人がモノ・コトに及ぼす関係」には、採取する、植栽する、栽培する、手入れする、保全する、監視する、嗅ぐ、触れる、愛でる、などなど、「使用」という言葉に収まりきらない、多様な関係がある。

（^C）、そうしたかかわりのどこまでが社会的に承認されているのかについても多様だ。処分する権利は認められないが利用は認められる、利用は認められるがそこから収益を得ることは認められない、収益を得ることも認められる、監視する権利を認められる、ものを言う権利を認められる、などなど幅広い。さらにはその認められ方についても、法律で認められている、法律にはないが広く社会的に認められている、その地域だけで認められている、認められているかどうか曖昧なところがある、認める人たちと認めない人たちの間に対立がある、など、これまた幅広い。

自然は所有できない、と言ってしまえば簡単なように見えるが、私たちは自然に^D対して、ある程度排他的なかわりを持っている場合が少なくないし、そのかわりについて社会的な取り決めや承認をしている。「所有」を最大限広義にとれば、私たちは自然を「所有」しているのである。そしてその広義の「所有」には、実に多様なかかわり、多様な社会的承認が含まれている。

（宮内泰介『人びとの自然再生』による。）

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 空欄（ a ） （ c ） にあてはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし同じ記号は一度しか選んではならない。

ア すなわち イ たとえば ウ また エ なぜなら オ しかし

問三 波線部 A 「ビンセント・ヴァン・ゴッホの作品」とあるが、筆者がこの話題を持ち出した意図として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「所有」の多様なありようを示す具体的な事例を挙げることによって、直前で述べた疑問について考察するため。

イ 世界的に有名な事例を挙げることによって、ここから述べようとしている「所有権」の正当性を強調するため。

ウ 「所有権」問題の発端となった事件を紹介することによって、自然をめぐる社会のしくみについて説明するため。

エ 「所有とは何か」という問題とは違う「モノの『所有』」の話題に転換して、それまでの序論から本論に移るため。

問四 波線部 B 「世界の人びとはなぜ非難の声を上げたのか」とあるが、筆者はこの理由をどのように考えているか。

次の空欄を補うように「所有」という語を用いて四十字以上五十字以内で説明しなさい。

ゴッホの絵は

と考えているから。

問五 空欄 にあてはまる語句として最も適當なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間と自然との問題 イ 人間と人間との間の関係
ウ 自分という個人の問題 エ 自然と社会との間の関係

問六 波線部 C「山や川や植物、海洋資源といった自然については、なおさら、その『所有』の幅は大きくなる」とあるが、このように筆者が考えるのはなぜか。次の空欄を補うように具体例を挙げて四十字以上五十字以内で説明しなさい。

人と自然には から。

問七 波線部 D「私たちは自然に対して、ある程度排他的なかわりを持つている場合が少なくない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適當なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は自然を一方的に利用するばかりで、消耗させている場合があるということ。
イ 特定の個人や団体が独占的にその自然を利用している場合があるということ。
ウ 自然とのかかわり方については、法律で制限されている場合があるということ。
エ そこに住む者が自然に対して愛着を持ち、保護している場合があるということ。

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 所有は幅の広いものだが、広義の所有の一つとして、自由にその所有物の使用、収益及び処分をする権利という法律的な所有が定められている。
イ 町の景観が変わると、その町の住人たちの生活における重要な側面や、住民自身の体の一部が壊されることになるため、住民運動が発生する。

ウ 人類の財産を保護するという権利の行使である限りにおいては、その所有者に対してのいかなる制限も不当な干渉として排除されることはない。

エ 自然に対してある程度の排他的なかわりを持つことは社会的な承認を得ており、人間は自然を所有しているといえることができる。